

## プロ意識って、何？

老人施設に勤務しだして間もない若者（当HPの「自己決定と援助」の模式図を作成する機会を与えてくれた若者）と、話す機会があった。若くて純粋なだけに、入居している高齢者の処遇に色々戸惑いを感じ、老人施策の現実に憤りも感じているようである。

あれこれ聞いていると、ふと施策とか、理念とかいう以前に、障害児の取り巻く問題でも日頃感じている職員の意識改革こそが急務ではと思った。確かに福祉サイドでは、いろんな資格の職種が配置されてきてはいる。果たしてそうしたいわゆるプロが多く側にいることが、福祉の充実であろうか？

先日訪問した元院長は、「最近一見福祉が進み、確かにプロという職種が多くなった。しかし、利用者（障害児、老人）には、素人である職員が側にいる必要があるのではないだろうか」との言葉に繋がる問題があるような気がする。

いわゆるプロは自分の専門分野では対象者のことは考えるが、それ以外は「自分の分野でないので……」とか言いがち。私は、給与をもらうのがプロとは思わない。対象を見捨てない気概がプロと思う。もし自らの分野で対象者の抱える問題に無力と思えば、他の専門職種を巻き込む手だてを考えればいい。何よりも、そのプロがなそうとしていることが、本当に対象者の日常に意味のあること？と問いかける素人的感覚が何よりも必要でないだろうか？

対象者も当然人間である。一人の人間が生き、生活するということは、いろんな問題があるものである。各専門分野の隙間を支える職種とは、何なのか。どれだけの専門の種類のプロが配置されればいいのか？

そうした意味で、私は、対象者の問題を見捨てず、つき合い切るという職員の意識改革こそが、急務と思う。

（2002年10月07日 記）